
茂吉と愉快なつわもの達

遊戯(Yuge)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茂吉と愉快なつわもの達

【Nコード】

N7239I

【作者名】

遊戯 (Yuge)

【あらすじ】

なんだかんだ言いながら面倒見のいい茂吉と、悪気は無いけどはた迷惑な友人達の日常を垣間見てみませんか？

一話完結(?)の短編集です。

川に映った自分に吠えて骨を落とす犬の話。その教訓は？ 1・欲張るな！

今の俺に指一本でも触れようものなら、何をするかわからねえぜ…、
気をつけな。

今日は朝からすこぶる機嫌が悪りいんだ。

いや、正確に言つと、朝は至って爽快な気分だったんだ。
奴を見つけるまでは。

空は青く晴れ渡り、少し冷ややかな秋の風に、日差しの温もりが心地よかつた。

俺はブレックファーストを庭でとろうと考え、こんがり焼いたジャムトーストを歯でくわえて、テラスから芝生の庭へ出た。

ふと振り返って驚いたね。

今、出てきたばかりの家の中に何者かが居るじゃねえか。

情けねえ事に、俺は一瞬固まっちゃまった。

（玄関の鍵をかけわすれたか…？ いや、昨夜就寝前に確認した時は、確かに鍵がかかつてた。

今朝は表に出ていない…。じゃあ、いったい奴は何処から…）

俺に見つかつて、奴も驚いたんだろう、微動だにしねえ。

しかも、奴もトーストをくわえてやがる。

俺は一言怒鳴り付けて、トーストを取り上げてやろうと考え、口を開けた。

「わっ…」

トーストを落とした。
しかも、ジャムの面を下にして。

大きな喪失感と共にそれを見下ろした後、ハッと奴を見ると、何と
奴もトーストを落としたのか、ポカンと口を開けて俺を見ていた。

(ふふっ…、お前もやっちゃったか…)

同じあやまちをしでかした奴に、一方的な親近感を覚えた俺は、冷
静さを取り戻して奴の観察を始めた。

(なかなかのイケメンだ…、うん、悪くない)

ライトブラウンのヘアーに、形のいい耳をしている。鼻は、程よい
湿り気を帯びて…

「モツキー、何してんのよ」

俺の彼女、美沙子だ。

駐車場の車の脇をすり抜けて来た。

いつもそうだ、彼女は、まともに玄関から入って来たためしがない。

「来るな！ 怪しい奴が居る」

「どこにいい？」

暢気な女だ。

次の瞬間、奴に目を戻した俺は心臓が止まるかと思つ程の衝撃を受
けた。

「い…いつの間…」

奴の隣にも女が居た。

「ネエ…、何処に誰が居るのお？」

美沙子は、眩しいくらいに真っ白なヘアを風になびかせ、愛くるしい瞳を俺に向ける。
いい女だ。

しかし…

美沙子と奴の女は、よく似ている。
純白のヘアに、ピンクのリボン、ダイヤとエメラルドの首輪まで
同じじゃねえか。

「ネエってば、誰もいないよお？」

美沙子は、呆然とする俺の視線を追った。そして…。

「ねえ、これ似合う？ おNewなんだ」

と、奴に向かって歩み寄っていく。

「ま…」

待て、と言うつもりは俺は、その光景に更に呆然とした。頭のリボンを直す美沙子と奴の女は、全く同じ動きをする。

「どう言う事だ…」

俺は美沙子の隣に立って、その肩を抱いてみた。奴も同じ事をする。

「今日は天気が良くてガラス窓が鏡みたいだね」

美沙子は、美しい自分自身に満足した様な笑顔になった。

(何てこった…、そんな事があるのか…。

ふっ…、いい勉強させて貰ったぜ。

トースト一枚は安い代償だったよ……。

ただ…、お前とはいい友達になれそうなきがしたのに…、少し残念だ)

俺と奴は、どちらも少し淋しげな笑みを浮かべて、暫く向き合ったままで呟いた。

「しっかりしろよ…、柴犬・茂吉…」

川に映った自分に吠えて骨を落とす犬の話。その教訓は？ 1・欲張るな！ 2

この物語は、動物達を擬人化しております。

生態や形態は、作者のイメージであり実態とは異なります。御容赦
下さい。

不確定更新です。

見ているだけで苛つくのに、なぜか見ちゃう。

俺は、何故か苛立っている。
自分自身、理由が分からない。

だいたい何でこいつは自分から釣りに誘っておいて、釣竿一本持たずに爪ばかり研いでやがる？
暗い所ではそうでもないが、今みたいに明るい所だと、こいつの瞳はスツと針程に細くなって…、インチキくさい薄情そうな目だ。

(嗚呼、苛々する)

「ニヤンだ?」

俺の視線に気付いたのか、涼二は、あるのか無いのか分からない唇をニヤリと歪めて、長い髭をひくつかせた。

「何で釣竿を持って来ねえんだ?」

「俺様ニヤア、この鋭でえあ爪があるだがや」

涼二は、手入れた爪を日差しにかざして見せる。

「お前…、どこの出だった?」

「イングランドすら」

……もはや、この星の者とも思えなくなつた。

俺が川に釣り糸を垂らして待っていると、背中を丸めて水面を覗き込んでいた涼二が右手をやりわり振り上げた。

（おいおい、まさか…）

バツシャーン！

小魚が宙に舞い上がり、地に落ちてピチピチ跳ねる。

「ウラァ！ 何してくれてんだ！ 俺の魚が逃げちまうだろ！」

「あつ…、すまニヤア」

嘘だ…、わざとだ、嫌がらせだ。

こいつは、気を引く為にこう言う事をする奴だ。

「ニヤンだよ…、謝ってるでねえかあ…」

喉をゴロゴロ鳴らして、俺の肩に頬を擦り寄せてくる。

「やめるよ…、気持ち悪い」

「勘弁しておくれかえ？」

又、頬を擦り寄せられるのは嫌だ。

グレーの柔らかい毛が、俺のライトブラウンの毛に絡まるのだ。

「もういいから…」

涼二は、何故か自分の手で顔を一拭きしてから、まだ跳ねている小魚を追い回しに行った。

ショッピングセンターのガラスに押し潰した様な顔で、「フーツ」とか言いながら、小魚相手に跳び上がる涼二を見て、俺はやっぱり吹き出して笑わずにはいられなかった。

苛つかせるが、嫌いじゃニヤイ……、まずい、うつった。

雄弁は銀、沈黙は金。でも黙ってばかりじゃわからない。

うっとうしい…、今日は朝から雨だ。

そして、目の前のこいつ…、輪を掛けてうっとうしい。

こいつは雨の日しか出て来ない。

そしてほとんど動かない。

一つの行為の時を除いては。

俺は、昨日スーパーで仕入れてきた新発売のチョコチップクッキーの箱を開けたところだった。

期間限定お試し価格でお買い得品だった。

(俺はどうもこの手の誘い文句に弱い…、へへ)

ファッション雑誌でも見ながら…、と思った時。

ファッションには縁遠いこいつが、のそつとやって来たのだ。

暗い碧の背中^{しやへ}は、雨に濡れて滴を垂らしツヤツヤに光っているが、要らぬ親切心をおこして拭いてやるものなら、この巨体で体当たりを食らう事になる。

こいつは、濡れたままでもいいのだ…、人んちのカーペットの上でも！

そして俺が、チョコチップクッキーに手を伸ばした瞬間…、消えた。

見たか？ あんた見たか？ 今の…。

こいつだ。
こいつの細長い舌が、シュシュツツと伸びて持ってった…、高速カメラでしか見えない速さで…、しかも箱ごと！丸呑みしやがった。

啞然と見ている俺を尻目に、満腹になったのか、こいつはいきなり顎を膨らませ始めた。

「おいおいおい、やめろ…、やめろ…、やめてくれ、こんなとこで…」

こいつの顎が、パンパンに膨らんで、俺は咄嗟に耳を塞いだ。

「やめろおおー！」

「ブオー！！ ブオー！！ ブオー！！」

窓ガラスが振るえ、ピシツとひびが入った。

家ごとが揺れ、飾り棚のマトリョーシカが床に落ちて散らばり、食器棚からは、グラスや皿が落ちて割れた。

（嗚呼！ うつとうしい！ だからお前は、牛蛙なんて呼ばれるんだあ！）

付き合いは長いが、こいつの名前は未だに聞いてない。謝ろうとしているのだろう、又こいつの顎が膨らみ始める。

「わかった！ いいよいいよ…、気にするな…、じゃあ又な！」

俺は、ドアを開けて奴のケツを蹴飛ばしてやった。
奴は、ブオブオ言いながら帰ってった。

「何しに来たんだ…」

俺は、毎日てるてる坊主を吊ろつと決心した。

季節の変わり目って何かと大変。

秋も深まり、朝晩めっきり寒くなってきた今日この頃。

『明日の朝は、早いところでは初雪となるでしょう…』

テレビのお天気お姉さんのお言葉だ。

北川クリスタルさん…、彼女は品のいい綺麗な猫で、アリス女学院を首席で卒業したらしい。

そんな彼女は、虫も殺さぬ顔をしながら、時折平気で嘘をつく。

降らないのに『雨が降ります』と言ったり、『傘は要らないでしょう』と言った日に限ってザザ降りになったり…。

可愛い小悪魔のたわいもない嘘だ。

「初雪って、本当？」

俺はテレビに下心満々の目を向けてしまった。

途端に中年のブルドッグが画面一杯に映った。

『犬民党は吠えます』
けんみん

興ざめだ。

だいたい、党の顔としてブルドッグは如何なものか…、怖いだろ。

しかも『吠えます』って…、誰だコピィ考えたの。

まあ、そんな事はどうでもいい。

俺は、クリスタル様のお言葉に従い、こたつを出す事にした。

小学校の低学年で習う様な歌に、雪が降ると『い〜ぬは喜び 庭駆

け回り』などと言うのががあるが、そんなのは最初だけだ。
寒いもんは寒いだろ。

と言う事で…、ジャジャーン！

この間届いたばかりの、超高級家具調こたつの出番だ。

深夜の通販番組を見てて、「これはいい！」と、電話してしまった。
あの手の番組は季節に応じて、確実にジャストタイミングな物を出
してきて購買意欲をくすぐる。

しかも、深夜の衰えた思考力に、会場のオバハン達の『ホオー』と
か『ワアー』とか、安っぽい拍手の嵐とかは、商品価値を数倍高め
る。

更に、数量限定だったり、番組終了一時間までに注文すると、おま
けがついたりなんてするともう…。

このこたつには、何と防水・撥水加工のこたつカバーが付いてきた
…、しかもリバーシブル！

茶系のチェックと緑系の幾何学模様だ。

一緒にテレビを見ていた美沙子は、花柄パターンがいいと言ったが、

「ここは誰の家だ！ 俺の家だぞ、俺の好きな柄を買っ！」

と言ってやった…、いや、そんなにきつい言い方じゃないけど…。

って、あれっ？ コード、こんなに短いの？

コンセントに届かないな…。

近い方のコンセントは、テレビやらDVDやらチューナーやらで蛸
足配線になってるし…。

三又コンセントに又、三又コンセントって有りか？ いやいや無し
だろう…、火事とか困るし。

消防車のサイレンは、どうも俺の野性を呼び起こしやがるのだ。
自分ちが燃えてるのに、遠吠えが止められないなんて…。

……、やっぱり延長コード、買ってこなきゃな…。

臭いニオイは元から絶たなきやダメ！

奴が来た…。

どこから情報を得たのだろう…、美沙子、あの女、裏切りやがったな。

「ちいゝす！ こたつ買ったてか？ 美沙ちゃんに聞いたニヤア」

やっぱり…。

今度来たらお仕置き決定だな…、あんな事やこんな事…、いやいや、頑張れ俺！ 脅威は、今、目の前に有る！

「やっぱりこたつはいいニヤア…」

涼二はうつとりした様子で、紫檀調の美しい天板にほお擦りした。

(おいおい…、ほらあ、お前の毛が天板に纏わり付いたじゃねえか…)

「お前んちにもこたつ有んだろ…、帰れ」

恐らく皆さんは、俺が酷い事を言ってる様に思われたでしょう。

こいつの恐ろしさをご存知ないから。

これしきの事を言われて凹む奴じゃないから…。

と言ってる間にも、奴は中に潜り込もうと、こたつ布団の下で頭を左右に降ってやがる。

断固阻止しなければ…！

ここで侵入を許せば、奴は春まで出て来ないだろう。

「ウラァ！ 出る！ 出る！」

俺は奴の派手派手しい尻尾を引っ張ってやった。

「ギャー！ フウーツ！」

「わああ！ やめろお！」

キルティングの敷き布団に爪立てやがった！

嗚呼あ…、糸がほつれてクチャと生地が寄っちゃまってる。

「何してくれてんだよ！ 誰に向かってフーとか言ってるんだ！」

睨み付ける俺を尻目に、奴は、しれえっと爪を舐め上げている。

ふてぶてしい顔だ。

苛々する！

揚げ句の果てには、後ろ脚で、耳の後ろを思いつきりカイカイカイカイし始めた。

羽毛の様な毛が、フワアと舞って……。

もういいや…、こいつに何言っても無駄だ…。

何処までもマイペースなのだ。

今だって既に奴は、こたつの上のみかんを一心不乱に手で転がして嬉々としている。

柑橘系は苦手じゃなかったっけ？

もうどうでもいい…、どうにでもしてくれ…、殺せ！ いっそ一思いに俺を殺してくれ！

「元氣出すニヤア…」

誰のせいだと思ってるんだ…。

俺は、『料亭の味 最高級花かつお』を一袋奴に持たせて、お引き取り願った。

「あざあゝすつ、ニヤンか、かえって悪りいニヤア…」

言葉とは裏腹な奴の舌なめずりを俺は見逃さなかった。

あの、したたかで満足げな笑みを一生忘れるもんか…。

奴が出てった後、玄関の鍵を掛け、部屋のありさまを見渡した俺には、もはや溜息をつく気力もなかった。

フローリングの床を転げる奴の毛ほこり…、何箇所もほつれた敷き布団…、奴の鋭い爪で引つ搔かれた天板…、ぐちゃぐちゃに潰されたみかん…、至る所に汁が飛び散っている。

こたつカバーが防水で、まだ助かった…、なんて自嘲気味に笑った俺は、次の瞬間、我が目を疑い固まった。

「あんの野郎お！ 一体誰の為に猫砂置いてやってると思ってんだ
！！」

今日の新聞…、しかもテレビ欄に…。

「何で、こんなとこに糞クソすんだよー！！」

本屋に行くとトイレに行きたくなるって言う…、インクの匂いが便

意を誘うって言う、あれか？ あれなのか！？

俺は、こたつをしまう事にした。

雪の中を駆け回ってこそ、犬の中の犬だ…。

雨が降ろうが槍が降ろうが…、いっそ矢でも鉄砲でも何でも降って俺を殺せえー！！

無口な奴ほど何考えてるかわからなくて怖い

奴が来た…。

いや、涼二じゃないです。

ちなみに、今日は雨降りです…、今回の“奴”と言うのは…、そう！ 奴です。

（クソツ！ てるてる坊主め！ へのへのもへじに書いたヒゲが気に入らなかつたか…？）

と、軒先のてるてる坊主を恨めしく睨みながら、俺は表へ出た…。駄目だ…、二度と奴を家にあげるまいと思っていたのに、雨混じりに吹きすさぶ北風は骨身にしみる（骨は嫌いじゃないが…）。

仕方なく奴を中に招き入れてやった。

どうやら、冬眠に入る前の挨拶に来たらしい。

毎年毎年面倒くさい奴だ。冬眠でも永眠でも、勝手にして頂いて結構だ。

「そうか…、寂しくなるなあ…。又、春に会えるのを楽しみにしてるよ」

我ながら感心する。

思ってもない事を、よくもまあいけしゃあしゃあと…。

でも…、実はこういうの得意ですう、何なら仰向けに寝て腹も見せちゃおう？

へへ…、世渡り上手って言うのかなあ…、違っかつっ！？

と、言つて目を離れた隙に、奴はあの忌ま忌ましい顎を膨らませ始めた。

「またかよ…、いい加減にしてくれよ…、もう帰れ、春に又来いな…」

俺は、奴を追い返すべくドアを開けた、その時。

「コケーンツ！ コツ…」

又、ややこしい奴が来た。ニワトリのケンタだ。

ケンタと言つても、フライドチキンではない…、もう少し前の段階の生きたニワトリだ。

もちろん、ケンタの前でフライドチキンの話題はタブーだから、お気を付け下さい。

鋭い爪とくちばしでつかみ掛かり、無駄に羽根をバタバタさせて、ウザイ事この上ないから…。

ケンタが首をカクカクさせながら入って来ると、途端に牛蛙の奴は顎を膨らませるのを止めた。

のんびり屋の奴は、せわしないケンタが大の苦手なのだ。

一方のケンタは、奴の事など気にも留めずに、部屋の中をうるつき回る。

「おーい、やめろやめろ」

クッションを突いて、綿を引っ張り出そうとしやがった…、こいつからも目が離せない、トホホ…。

しかし、ふと目をやると、牛蛙の奴がのそつと動き出していた。

「そうかそうか、もう帰るか…、いやあ、本当に寂しいよ…。春、目が覚めたらすぐ来いよな…、何かご馳走するからさ…」

俺は、口をついて出る出まかせをつらつらと並べつつ、内心ケンタに感謝していた。

（ケンタ様様だ）

そして、重そうな牛蛙の後ろ姿に満面の笑みで手を振った俺は、部屋に戻って姿の見当たらないケンタを捜した。

「ケンタ？ どこだ？ ケ…ンタ…、お前…、一体そこで何を…？」

ケンタは、クッションから引っぱり出した綿を、ソファの下の暗がり山積みにして、そこに鎮座ましましていた。

「クツ…」

ケ、ケンタ…、お前が力^{りき}んでいる様に見えるのは気のせいか？ 嘘だろ…、嘘だと言ってくれ！

ホツと力を抜いてから、ケンタが立ち去った後には、うつすら湯気の昇る産みたての卵が一個あった。

ケンタ……、お前……、雌だったのか!?

身に覚えの無い…、これは罪？　そして悲劇は起こった。

俺は今、人生最大の苦悩に直面している。

昨日、ニワトリのケンタが、俺んちで卵を産み落としてった。奴…、いや、彼女は何も告げずに去ってしまい、俺は産みたての卵と二人(?) 残され、途方に暮れた。

彼女はわざわざ俺んちに産卵しに来たのだろうか…？。何故？

これが他人事なら、俺は迷わずこう答えてやる…。

『お前の子だからに決まってるじゃねえか！』

この卵は俺の子なのだろうか…、この…、この脇の下で温めている卵は、俺の子なのか…！？

しかし、子供が出来るにはそれなりのステップが有る訳で…、俺にはその段階の記憶が無いのだ。

昨日奴が…、いや、彼女が卵を産むのを見るまで、俺は思い込んでいたのだから…。

ケンタは、雄であり　でありMenなのだ…。だって、“ケンタ” って普通は男の名前だろう…。

まあ、今更何を言ったところで、逃げ口上にしか聞こえないだろう。産まれてくる子供に罪は無いし…、大人の都合の犠牲にもしたくない…。

よし…、俺も男だ！

潔く現実を受け入れよう。

さあ、いつでも孵化^{ふか}してくるがよい…、我が子よ！

とさかを持つ犬だろうと、肉球のあるニワトリだろうと、私が君の父だよ！

嗚呼、種を越えた愛の結晶よ！

「ネエ…、ゆで卵、半熟がいい？ 固茹でがいい？」

対面式のキッチンから、美沙子がカウンター越しに、暢気な顔を見せる。

美沙子にも真実を告げなければ…、俺の元を去って行くだろうな…、ああ見えて嫉妬深い女だから。

それを愛されている証拠だと考えた事もあるが、ケンタとの間に出来た子を、共に育てようとは言ってくれないだろう…。

「ネエってば！ 半熟ならもういいと思うんだけど…？」

「半熟……………？ 卵？」

「そつよ、どうする？」

待て待て待て待て…、卵…、卵…、卵？

しばらく買った覚えがないぞ…。

俺は、ずっと血の気が引くのを感じ、脇に意識を集中したが、そこには変な汗を感じるだけだった。

「無いっ！！！！」

俺は弾かれた様に腰を上げて、クッションをどかしたり、ソファのマットの隙間に手を入れてみたりして、我が子を捜した。

「どうしたの？」

訝しげな表情の美沙子が、エプロンで手を拭きながらやって来た。

「た、た、たま、たま、卵が……」

「ここにあった卵なら今、茹でてるよ……。モッキーがトイレ行った時に置いてあったから……。食べたいんだろうと思って……。気が利くでしょ？」

NO————！！！！

我が子が……。初めての我が子が……。

「あ……。あれは……。あれはケンタが……」

「ああ、ケンタが産んでったの？」

「えっ？」

美沙子は平然とキッチンへ戻って行った。何を知ってるんだ……。美沙子!?

「ケンタが雌だって知ってたのか？」

美沙子は、ヘラヘラ笑いながら言った。

「何言ってるの〜？ 時々卵産んでくじゃない…、モッキーいつも美味しいって食べてるじゃん」

俺は寂しさと安堵の混じった不思議な心境で、鼻歌混じりの美沙子の横顔を見ていた。

そして、ふと恐ろしい考えに至った。

ケンタは時々うちで俺の子を産んでいたと言っ…、美沙子はそれを素知らぬ顔で俺に食わせていた…。

オーマイガッツ！

嫉妬と言う名の狂気のなせるわざかっ！？

美沙子がニヤリと笑った様に見えた…、お前には逆らわない方がいいな…。

招かざる友あり、遠方より来たる…。何のために？

遠く遠く、ほとんど赤の他人に近い親戚のハスキー犬、バウワ
ウフン・ウルフガネツガーJr. が何を思っただか突然、はるばるシ
ベリアから遊びに来た。

奴はとにかく目が恐い。

「そんな目付きじゃ友達出来ねえぞ」

俺が注意すると、奴はキュツと眉を上げて、器用にパッチリ二重を
作って見せる。

それが又、何とも気持ち悪い。

二重を維持する為に、瞼に力を込めているらしく、色素の薄いグレ
ーの瞳が爛々と輝いて見えるのだ。
もちろん瞬きまばたすらしない。

「よけい恐え〜よ…、やめろ」

おおっと、意外に気にしてたのかなあ…？
途端に肩落としてしょげ返っちゃまったよ。

「いや…、自然体が一番お前らしくていいって事だ…、凜々しくて、
うん、いいよ」

「そ、そう？ 本当にそう思う？」

単純な奴、アハハ…ハ。

奴はパツと笑顔を見せて、少し頬を…、赤くした様…な、ん？

んんー！？

なにゆえ、お姉言葉！？

奴はもじもじ俯いて言った。

「茂吉さ…、まだ美沙子さんと…？」

この野郎！ 狙いは美沙子かっ？

「俺さ…、前に美沙子さん紹介されてから、気になって気になって…」

やっぱり！ 美沙子をシベリアに連れて帰ろうって腹かっ！？

「気付いたの！ あたし茂吉が好き！」

「はいいいいい！？」

俺は一回り大柄な奴に抱き着かれ、勢い余って押し倒された。目眩がする…、奴はどさくさ紛れに俺の顔を舐めまくってやが…、くっさあ！ くっせえ、くせーよ、お前！ 何食ったんだ？

俺は先日のケンタの一件を思い出してハツとした。

雄だとはかり思い込んでいたケンタは、雌だったじゃねえか…！

「バウワウフン・ウルフガネツガー」…、お、お前も…、もしかして雌なのか？」

「やあだ〜！ あたしはれっきとした雄ですう〜。それに、バツフイーって呼・ん・んでっ」

そこに“れっきとした”と言う言葉が適切かどうかは分からない…、とにかくく…、

「どけえー！！！！！」

俺は奴を押しどけた。

「あ〜〜れ〜〜！」

ムカつく！

奴は大袈裟によるめいて、上目使いに何度も瞬きして俺を見てやがる。

そこへ、

「ひど〜い！ モツキー、バウちゃんが可哀相じゃん！」

「美沙ちゃん」

美沙子は俺を睨み付けながら、奴に駆け寄って手を貸している。何なんだ！ こいつら！

俺一人悪者か？

その時！ 奴が小さく舌を出してほくそ笑んだ。

しまった！ ハメられた！？ 作戦だったのかあつつつ！？

奴は、美沙子が来る時間を知っていてわざと！？

案の定、美沙子は俺を乱暴者と言いつつ、口を利いてくれなくなった。奴は俺と二人きりになるとベタバタしてきて女房気取りだ。

「やめろよ！ ケツの臭い嗅ぐのだけはやめてくれ！ いっやだよ…、お前のケツの臭いなんて嗅ぎたかねえよ！ やめろ…、やめろって言ってるだろうがよ！！ ケツをどけるおお！！！！！！」

バツフィー頼む…、美沙子連れてシベリアへ帰れ…。

人生に犠牲は付き物、皆で幸せなんて有り得ない！？

静かだ…。

聞こえるのは、刻一刻、時を刻む時計の音だけ。

俺はホットウイスキーを片手に、厚手のカーテンを少し開けてガラス越しに外の暗闇を見た。

寒いと思ったら、雨はいつの間にかみぞれ混じりになっている。

「夜更けには雪に変わるな…」

俺は口元にニヒルな笑みを浮かべて、ホットウイスキーを口に含んだ。

「ブツ、熱っ！ 熱熱熱熱っ！っ！っ！」

俺は犬だが猫舌だった。

『馬鹿ねえ…、気をつけてよ』

呆れた様な美沙子の笑顔が思い出される。

元気で変わり無く過ごしているだろうか…。

美沙子は今、遠い空の下に居る。

遠いシベリアの空の下に…。

俺は、この平穏な生活と引き換えに、美沙子を差し出したのだ。なかなか国へ帰ろうとしないバッフィーに、美沙子を連れて帰らせ

『美沙子、お前海外旅行行った事なかったよな…。バッフィーと一緒に、あいつの国行ってみたら？ 金の事なら心配すんなよ…。少し早いクリスマスプレゼントだ、俺が出してやる。ゆっくりして来いよ』

すまない美沙子！

そつでもしないと、あの野郎いつまでも居座りそんな勢いで…。

俺…、怖かったんだ。

“貞操の危機”って奴？

あいつ…、目がマジなんだからあ…。

俺は美沙子への後ろめたさに表情を曇らせ、琥珀色のホットウイスキーを見つめた。

その時、玄関で物音がした。それは、鍵を開けようとする音…、合鍵は美沙子しか持っていない筈…。美沙子か！？

それにしても早過ぎないか…？

旅立ったのは二日前の朝だぞ…、じゃあ今、まさに鍵を開けたのは…、誰だあつ…！？

「茂吉…いい！ 会いたかったあん」

バ…、バ、バ、バッフィー…！？

何故お前がここに！？

いつもの様に、俺は押し倒され、顔を舐め回される。

「ただいま、バウちゃん本当モツキーが好きなのねえ」

美沙子の暢気な声がして、俺はバッフィーを避けて顔を上げた。

「み、美沙子…、ど、ど、どう言う事だ？」

美沙子は鍵とキーホルダーの束をジャラつかせながら、上機嫌な声でのたまわった。

「いい温泉だったわよ」

「温泉!?!」

バッフィーが、俺の頬に腕を擦りつけてきた。

「そつなの！ 見て見て見て見てえん、お毛毛がサラサラよあ」

ええい、お前の毛など、どうでもよいわ！

バッフィーは放つといて…。

「温泉って何だ!?!」

「だって、クリスマスプレゼントだって言ったじゃん。あたしの好きなところ行っていいでしょ？」

「お、俺はこいつをシベリアへ送り返せと…、ああ、うつとーしい！ どけっ！ バッフィー！」

「あ〜〜れ〜〜！」

ムカつく！

又、わざとらしく大袈裟によるけやがった！

「モツキー、酷い！ バウちゃん、モツキーに会うの楽しみにしてたんだよ！」

美沙子はバツフィーに寄り添い、俺を睨む。

「いいの、美沙ちゃん。あたし…、こんな茂吉も好きなの…」

「バウちゃん…、なんて健気な…。ほんとバカな子…」

「美沙ちゃん」

「バウちゃん」

二人はひしと抱き合い、訳の分からない涙を流す。

何なんだ！？

この三文芝居、猿芝居、茶番劇…、又俺一人悪者かつつ！？

無然とする俺を尻目に、二人は土産の温泉まんじゅうでティータイムと洒落込むのだそうだ。

ここは俺んちだぞ！！

俺への土産じゃないのか！？

まったく…、女って奴は…。

ちよっと待ったああ！

バツフィー、お前は女じゃねえぞお！！！！！！

俺の静かな時と、金…、返せ…。

嗚呼、食物連鎖。自然の摂理に逆らうなっ!?

なぜだ…、なぜこの二人はこんなにも楽しげに笑い合っているのだろう。

不本意ではあるが、言ってみれば美沙子とバッフィーは、俺をめぐってライバル関係にある筈だ。

なのに美沙子はバッフィーがいたくお気に入りだ。

しかし俺は知っている…、美沙子のしたたかな女心を！

どんなに俺を好きでも、バッフィーは所詮男だ。俺がアニマルでもノーマルである以上、

『お話しにならないわ』

的な上から視線を時折覗かせる。

甘い優越感にとらわれているのだろう…、隠れDSめ！

一方のバッフィーはと言えば、美沙子に近づく事で俺の気を引けるとても思っているのだろうか…、

「美沙ちゃんと、おっ揃ー！」

とか言いながら、頭にピンクのリボンをつけて貰って俺に見せびらかしに来た。

どうひいき目に見ても、オカマバーのお笑い担当だ。

バッフィー、悪い事は言わない…、その格好で表に出るな…。不審尋問されるぞ。

(これは教えてやった方が親切なのか?)

などと俺が考えていると、玄関で物音がした。

(やった！ バッフィーから解放される…)

俺は意気揚々と玄関のドアを開けた。

「ハイ」

「クオ…、コーツコーツ」

「ケ、ケンタ…」

スツと血の気が引いた。

俺はかねがね奴と…、いや、彼女と、子供達の事を話さなければ…、とは思っていた。しかし、今は…。

「ケンタ、実は…」

(言えない…、お前が腹を痛めて産んだ卵を全部俺が食っちゃまったなんて…。父親である俺が、我が子を皆食っちゃったなんてええつ！！)

俺があれこれ言い訳を考えている隙に、ケンタは首をカクカクさせて中へ入って行ってしまった。

「ま、待て！ ケンタ…」

まずいつ！

何度か俺の子まで産んだ、言わば正妻とも言うべきケンタが乗り込

んで来たのだ!!

俺に惚れた女三人(?)の、愛憎にまみれたバトルが始まってしま
う!

修羅場だっ、血の雨がふるぞぉー!!

ファイーツツ!!!!

「あらあゝ、ケンちゃん」

バッフィー…、すっかりオカマバーのママのノリじゃねえか。

「来た来た来た来た、待ってたわよ」

美沙子は満面の笑みを見せて立ち上がる。

「えっ?」

ひょうし抜けして立ち尽くす俺に、美沙子はヒラヒラ手を振っての
たまう。

「ちょっとお食事してきまゝす。ケンタが草食系男子紹介してくれ
るって言うのよ。合コンよ」

「今、匂よね」

笑顔のバッフィーは口元に明らかな肉食の犬歯を光らせる。

俺は、いそいそと出て行く“何だかな”な女達の背中を見送った
後、一人カップラーメンを食した。

俺と言う者がありながら合コンって…。
まあ、流血の事態はまぬがれた訳だし…、『仲良き事は美しきかな』
とも言っではないか。
結果オーライ、よかったよかつ…。

「トサカにくるうっ！！」ボタンと勢いよくドアを開け、凄まじい
剣幕の美沙子がずかずかと入って来るなりバッグをソファに投げ付
けた。

「あれ？ 早かったね…」

「茂吉いん！ やっぱり貴方だけよおん！」

バッフィーは俺に駆け寄り、抱き着いてきた。
それを美沙子が引っぺがして俺に訴える。

「雄鶏よ！ 雄鶏ばかりよ！！ 草食系男子って言うか…、もろ
草食動物よ！！ ひどいでしょ！？」

「ブハッ！ さすがケンタ…、やる事が違う！
グツジョブ！」

俺は、（ざまあみる！）と込み上げる笑いを噛み殺して、目の前で
女二人（？）が俺を取り合うさまを見ていた。
悪くない気分だ。

ふと美沙子が俺を見た。

「モッキー！ 突っ立ってないで何か作って！ コーンとか葉っぱ

とかばっかりで何も食べてないのよ…。お腹ペコペコ!」

「あたし肉がいいわ〜! 鶏唐食べた〜い」

「イイエッサー!」

俺はお二人のご注文をお伺いしてキッチンに立った。

何か違う気がするが、細かい事は気にしない気にしない。

肉食系男子はドーンと構えて女子を受け入れてやるものだ…。んん
??

ちよつと待ったああ!!

バッフィー、お前は女子じゃねえぞお!!

危ない危ない…。

類は友を呼ぶ…、誰が呼んでいっつった!?

その日俺は、近所の焼肉屋に向かって商店街を歩いていた。空には既に何番目かの星が輝き始め、アーケードの下では店々の看板がともされた冬の夕暮れ。

目の前には腕を絡めてピッタリ寄り添い、弾む足取りの美沙子とバツフィー。

時折ショーウィンドーにへばり付いて、

「モツキー、あたしクリスマスプレゼントあれがいい〜!」

「茂吉! あたしはこれねえ!」

などと猫撫で声で言いながらいつにない笑顔を見せる。

お前ら俺の金で温泉行つたろ!? たらふく蟹食つたらしいな! 土産も食つちまつたじゃねえか!? 今だってお前ら端はなから手ぶらだし…。

どこまで図々しいんだ…、面の皮が厚いつて言うか、心臓に剛毛生えてんじゃね?

と、俺が心の中でわめいていると、背後でふいに男の低く鼻にかかった様な甘つたるい声がした。

「オーマイスツウィートダーリン!! ハニター!!!」

「は?」

男性ファッション雑誌のモデルの様なシェパードが居た。クールビ
ューティーなジャーマンシェパードだ。
バッフィーは驚きながらも、凄く笑顔になった。
怖っ！

「バイエルン！？」

ソーセージ？

男はバッフィーに駆け寄り、抱きしめ合いケツの臭いを嗅ぎ合い顔
を舐めくりまわし合う。

焼肉食う前でよかったね…、って言うか、公衆の面前でそこまで…、
痛い痛い痛い、痛い奴らだ。

しかし…、状況からして彼はバッフィーの“恋人”！？

帰りの遅い彼女（？）を迎えに来たとか！？

でかしたバイエルン！

心置きなくさっさと連れて帰りなさい、君達の愛の巣へっ！！

その時、バイエルンの何とも言えない目が俺に向けられ、背中に寒
いものが走った。

「彼やな〜！ あんたのええ人つてえ…、素敵やな〜い。うち
も好きになつてまいそやつっ」

何ですとっ！？

バイエルン…、お前も…そっちかつ！？

そっちなのかあっ！？

しかも何故に関西のニュアンス！？

慌てた様なバッフィーが俺に寄り添ってきた。

「茂吉はあたしのもの！ 手を出しちゃ、ダメだぞっつー!!」

おいおいおいおい…、何なんだこの展開!?

美沙子…、何とか言ってるやれ…よ…って…、美沙子?

なして目がハート!?

美沙子! 俺はこっちだぞ!!

美沙子おー!?!?!?!

T O b e c o n t i n u e …

続・類は友を呼ぶ…、誰が呼んでいいつつた!?

「くくかんぱあーい!」「くく」

こいつら何回乾杯やってんだ。

バイエルンはドイツ出身で、関西に留学経験の有る友人に日本語を習ったらしい。

焼肉は初めてと言うが、お口に合ったのか食うわ食うわ…。そしてそれ以上にビールを飲む飲む…。

しかしあまり強くないみたいだ。

目が座ってるし、さっきから変なタイミングで笑ってくるんですけど…?

美沙子はバイエルンに肉を取ってやったり、おしぼりで口拭いてやったりしてかいがいしく世話を焼いている。

俺にはそんな事してくれた事ないぞ!

この待遇の差は何だ!?

どうやら美沙子は、モデル張りのバイエルンに舞い上がっている様子だ。

しかし美沙子よ! 哀しいかな、バイエルンはバツファイーサイドの男なのだっ!!

どちらかと言えば、俺の方に分があるのではないかな? フフン。俺の中で自分自身気付いてなかった“ちょいワル”がムクツと頭をもたげた。

「あのさあ、俺もバイエルン…って呼び捨てしていいかなあ? 俺達もう友人だろ?」

バイエルンは頬を赤らめ嬉しそうに笑って言った。

「うちは“モキティ”って呼んでええかあ…、キュートなあんたにピツタリやあ〜」

ええっ…、モ、モキティですかあ…微妙〜。

「ダメよあ〜、ダメダメダメダメエ！ モキチンって、チンって！
？ ぜえーっ対ダメエ！ モキチンのチンはあたしのチンですからねえ〜。」

茂吉い、バイエルンは他人よあ…、あたし以外のチンになっちゃヤダア！」

うおーい！ バツファイー！

誰もチンなんて言っつてねえぞっ！

ましてお前のチンでもねえっつうの！

つうか、チンって何だよ…。

などとバツファイーの不毛な会話に気を取られている間に、美沙子はバイエルンと携帯の番号とメアドまで交換して、ツーショットで写真を撮りまくっている。

待受にするつもりだな…、俺のクシャミ直前の変顔はお払い箱かっ！？

バイエルンの気を引いて美沙子に見せ付ける作戦が…。

バツファイー、お前のせいだ…、お前がチンだ何だっつて横槍入れるから…。

俺はバイエルンに、本来の目的を思い出させてあげると言う親切ぶりを発揮する事にした。

「いやあ、しかし寂しくなるなあ…。バッフィーともいよいよお別れかあ…」

「何でえ？」

「げっ！？ バッフィー酔ってんじゃない…。」

「だって、バイエルンはバッフィーを迎えに来たんだろ？」

「違う違う！ バイエルンはクリスマス休暇を茂吉んちで一緒に過ごすよあゝ、年明けまで居られるのよねえゝ」

「イエース、ウイキャ〜ン！」

「ウォー！！！」

「チェンジだ、チェンジだ、お前なんかチェンジだぁー！！！！！！！」

そしてやがて、史上最悪のクリスマスがやって来るのだった。

寝た子を起こすな！ 誰が面倒見てくれるんだっ！？

ああ早く帰りたい…。

ここの灯りは青白くて冷たく寒々しい。

酒の力を借りてほんの束の間夢心地になる事も、たった一時オッサンが少年の心呼び戻す事も許さない。

交番…、そこでは誰しもが否応なしに厳しい現実引き戻される。

とは言っても、今俺達がここへ連れて来られたのは自業自得…、いや！

この忌ま忌ましい、もはや性別すら不明瞭なエセ外国人二人のせいだ！！

一時間程前

焼肉屋で散々飲み倒したバッフィーとバイエルンは、仲良く腕を組んで足元もおぼつかない様子で店を出てった。勘定など素知らぬ顔で。

「ごちそうさま」

釣銭を待つ俺を尻目に、美沙子もヒラヒラ手を振って出て行く。俺は空になった財布と心を抱えて、己に言い聞かせた。

今の『ごちそうさま』は、俺に言ったのだと…。

「ありがとうございましたあ」と返す若い男性店員！ お前に言ったのではないぞっ！

もしそうならば、余りに俺が可哀相だ…。

俺は、釣りと一緒にミントガム四枚をくれた彼に、心の中で八つ当たりした事を詫びつつ店を出た。

このガムは俺のもんだ。

食ったら金を払う…、当然とも言えるが、奴らが見て見ぬ振りしたその行為を為した俺の名誉の証だっ！！

「ウォ〜〜ン！」

「ワフ〜〜ン！」

「キヤイ〜〜ン！」

夜十時を過ぎて、人影もまばらな郊外の小さな商店街。

バッフィーとバイエルンは一緒に一本の電柱に向けて片足を上げて用を足し、快樂の雄叫びをあげていた。

美沙子は手で目を覆いつつも、指の隙間からしっかりバイエルンの逞しいナニを見て喜んでいる。

「マーキングよ、マーキング！ 私達がここに来た記念よ〜」

「バッフィーとバイエルン参上って書いとこか〜」

阿呆かつ、お前ら！ 何眠たい事ぬかしてんねん！

美沙子、何がそないに嬉しんや！？ って、あれ？ 俺まで関西？

俺は改めて己の順応性の高さに感心した。その時。

「あー、もしもし。君達、ちょっとよろしいですか？」

振り向くとそこに、“中年と若手”のありがちなポリスメンコンビが居た。横綱級の土佐犬だ。

その声は下手に出ながらも、職務遂行と言つ冷めきつた強い意志をはらんでいる。そんな彼らに対し、奴らは…。

「キヤ〜ツ、素敵い〜！」

見て見て見て見てえん、コスプレよ〜！

逮捕されちゃうぞっ！！」

「いやっホンマや！ そそるなあ〜、うち制服に弱いねえ〜ん」

恐らく今の俺の顔色はまつつあおだ。

今や恐いもの無しの奴らは、小難しい顔の警官達に擦り寄っていった。猥褻物をチン列したまま。

「ちよつと他所で話しを聞こうか」

何故俺に語りかけるのですか！？

警官達も目のやり場に困っているのだ。

今更他人の振りも出来ず、美沙子だけをタクシーで帰し、俺達はしよっぴかれた。

どうやら近所から苦情の電話があったらしい。

そりゃそうだろう…、酔っ払いが騒ぐだけでも迷惑なのに、それがお姉言葉のダメ声で下ネタを叫ぶ露出狂ときたら…、俺なら隊の出勤を要請したいくらいだ。

バッフィーとバイエルンは未だに酔いが醒めず、俺様な態度をとり続ける。

そして彼らのパスポートのSEX（性別）がMALE（男性）である事が、事態を更にややこしくした。

「男性ですね？」

「やだっ！ 失礼ねっ、女性ですう。だいたいこんな所に連れ込んだりして…。大使館に連絡しなっつさ。い。治外法権の侵害よ」

「そっやそっやっ！ 国際問題やでえっ！ あんたらのせいで第三次世界大戦勃発や、怖〜い！」

中年の警官が四苦八苦している尋ねながら調書を書いている間、若い警官は俺達の持ち物を一通り調べて簡単な身体検査をしていた。いや〜な予感がした。

案の定、若い警官がバッフィーの身体に触れた瞬間…。

「アハン…、ウフン…、イヤン、そんな…。貴方慣れてるのネ。今度はあたしが…」

若い警官は咄嗟にバッフィーの手を払った。

「あ〜〜れ〜〜」

またやってる。大袈裟な！

「あんた！ 酷いやないかっ！？」

バイエルンはバッフィーを抱く様にして若い警官を睨み付けた。若い警官は怒りのせいか頬がプルプル震えている。

本官殿お！ 迷う事はありませんっ、腰の拳銃を抜けえーっ
！！

そして、撃つべし！ 撃つべし！ 撃つべし！
これは明らかに正当防衛でありまあすつつ！！
私が法廷で証言致しましょう！

とは言っても、これ以上大事になったら俺も面倒臭い。

「バツファイ、いい加減にしる。お前が悪いぞ…、本官殿に謝れ！」

あ、本官殿って言っちゃった。

「茂吉いん、怒っちゃヤダア…。ごめんなさい、あたしが悪かったわ…。ぶつて、ぶつてえ！ この雌ブタをぶつて！！」

「はいいいい！？」

「ええなあ…。モキティ、うちも叱ってえなあ。うちもぶつて欲しいいいい！！」

ゾッ！！ ドッカーン！

自爆した。

どうやら俺は、奴らの眠れるM魂をたたき起こしてしまった様だ。

中年の警官がニヤリと笑って言った。

「もうお引き取り頂いて結構です。貴方が言った方が聞く様だ。後は責任を持って言い聞かせておいて下さいね」

うおーい！ こっちに丸投げかいっ！？

善良な市民の盾となって散るのもあんたらの仕事だろう！？

「あのう…、強制送還とかは…?」

「ハッハッハッハッ」

大笑いされて戸口を指差された。

警察は被害が出ないと動けないとよく耳にする。

俺は害を被ってるんだああー！ー！ー！ー！
税金も払ってるぞ……。

せめてパトカーで送ってくれないか…。

そうきたかつ!? 独身貴族も楽じゃナイ!?

俺のうちは占拠された。

奴らは昨日からクリスマスパーティーの準備にかかり、今日もツリーを飾り付けている。

キャツキャツキャツとはしゃぐオッサンがこれ程見苦しいとは初めて知った。

だいたいこんな狭い仏教徒の家に、そんなに大きなツリーが必要か?

「何か貧相なやあ…」

貧相って…、カチン。

言ってやる! 俺だって言う時は言うぞっ!

「バイエルン! お前んちにはさぞ巨大なツリーがあるんだろうな。帰った方がいいんじゃないのか? うちには貧相なツリーしか置けねえし…」

な、何か、すねたみたいに尻すぼみになってしまった…。

対するバイエルンは高笑いの後、バッフィーと寄り添ってのたまう。

「アハハハツ…、家が貧相とか狭苦しいとかは関係あらへん。クリスマスを大事な友人と過ごすのが一番や、なあ」

くおのおおおっ! 野郎…、良い事言った様に見せ掛けて、何気にサラッと人んち小馬鹿にしゃがった!

誰も家が貧相だなんて言っつてねえぞ!! 揚げ句の果てには狭苦しいだっつ!?

誰のせいでこの家の人口密度が上がってると思ってるんだ!?

俺一人ならちようど良いんだ…、座ったまま何にでも手が届くつて
言うか…、一人用の家なんだあつ！！ 寿命の半分近くをローンに
費やすんだぞつ、言うな…。言ってくれるな…。

いたたまれなくなった俺が、何か口実つけて出掛けよつかなあ…、
なんて考えていると、バツフィーがこう耳打ちしてきた。

「バイエルンはバロンでおうちがお城だから、小狭い家に慣れてな
いのよ…、許してあげて」

あんたまで小狭いって…、えっ？

「バロン？」

「そう、男爵よ」

男爵…、芋？

“男爵”と聞いても、“男爵芋”ぐらいしかピンとこないが、いわ
ゆる貴族とかの類いだろつ。

実際にそんな人居るんだ…、って言うか、こんなんでもいいんっすか
！？

肩肘ついてゴロ寝しながらテレビ見てポテチ食ってますけどお？

男爵芋が芋食ってますけどお？

そついうの“共食い”って言うんじゃないっすかね！？

来たばかりの人んちで、よくまあそこまでくつろげるなあ！

悪い意味で凄い存在感。

しかし…。

そのかさ張る態度こそが男爵なればこそと言われれば、

「なるほどそうか…」

とも……、思っかつつ！！　バーカ、バーカ、お前ら二人ともバカばっかり！

ハアハア…、虚しい…、虚し過ぎる。

今時小学生でも言わない様な悪態のレベルの低さ…。

そうして心の叫びに疲れ果てた俺が、

（美沙子に電話して映画でも見に行きたいなあ…、でもこいつらも付いてくるんだろうなあ、うつとーしいなあ）

などと考えた頃。

ピーンポーン

誰か来た！　美沙子かなっ？

そのナイスなタイミングに、俺は美沙子との運命を実感しつつ勇んで玄関のドアを開けた。

「待ってたよ！　美沙…子…？」

違った。

そこには、アニメか何かで見た事あるコスチュームの男子一人と女子二人が立っていた。

「突然恐れ入りますが、マイローード、我が御主人様はこちらに？」

「へ？　マ、マイロ、じ、じしゅ、御主人様って？」

男子はコホンと咳ばらいを一つして毅然として言った。

「わたくしはバイエルン男爵閣下の執う事でございます」

「「メイドだつちゅうの!!!」」

なぜか彼女らは往年の『だつちゅうーの』のポーズをとった。

「はいい？」

メイド…、しかも一人はメガネっ娘！

メイドなんて、街頭でチラシ入りポケットティッシュしか頂いた事のなかった俺は、一瞬で妄想の世界へと堕ちてしまった。

益々乱れくる様相を呈した我が家の風俗…、高まる人口密度。

前回、既に国家権力に見離されている俺は…。

やけくそでいよいよ18禁かつ!?

聖なる夜は果たして性なるか!?

次回に続く

よい子はマネをしないでね!？ お父さんお母さんと一緒に見ましょー!？

「キヤ〜！ ルルちゃん、ララちゃん!？ おひさ〜!」

バッフィーはメイド達に両手をチラチラ振りながらぴよんぴよん跳ねた。

「お姉様あ〜！ ご注文の品、持って参りましたあ〜」

ご注文の品って何だ？

双子のプードルのメイド達は、バッフィーに駆け寄り抱き着いた。君達、食われるぞ！

きつと赤頭巾ちゃんを食おうとした時の狼はこんな顔だったろう、などとバッフィーの大きなお口を見て思った俺は、次の瞬間、バイエルの複雑な表情が目に入り息を飲んだ。

その真剣な眼差しは、真っ白な長髪のアフガンハウンドの執事に向けられている。

「こんなとこまで何しに来たんや？」

「何故黙って行かれたのです。何故わたくしをお避けになるのですかっ？ マイロードッ」

その瞬間、目を閉じたバイエルンはブルツと身震いした。

「べ…、別に…避けてなんか…」

白執事はバイエルの前にひざまづき、手を取って見つめ合う。

二人だけ別世界に行ってしまった様だ。

な、何すか？ いきなしのエロチシズムなこの展開。昼メロ？
貴族の主と美少年の執事…。ひよっとしてこれは、見てはいけない
禁断のホニヤララなんじゃないのか？

空気を読まない白執事は、バイエルンの手の甲に軽く口付けした。
バイエルンは「あんっ」とか言っつて頬を染め顔を背ける。

疲れるうっ！ ドツと疲れる。何やってくれてんだよ、人んちで！
てめえら、こんなところでおっぱじめんじゃねえぞ！！ 真っ昼間だ
ぞっ！

おい、そこっ！

芋！ 芋男爵！ それとモツプ！ 芋とモツプ！ お前らだよ！
マイローーだか何だか知らねえけど、とっとと連れて帰りやがれ！
あそこでメイドに挟まれてニヤンニヤンじゃんけんとかやってるキ
モイオツサンも忘れんな！ お前らが盛り上がれば盛り上がる程こ
っちはドン引きなんだよ！

だから俺はこの話し始める前に言ったんだ。

『我輩は犬である…』から始めたら？ って。

そしたら少しは文学的で格調あるものになってたんじゃね？

まあ、過ぎた事を今更あーだこーだ言っつても仕方ないが。俺の望み
はただ一つ…、我が家に再び平穏な時間を取り戻したい。

困った時の…、サンタさんっ！ 願わくば我に静かな孤独を与えた
もうー！ ！ ！ いい子にしますからあっ！ いやマジで。

俺は心の中でひざまずき、胸の前で手を組み祈った。その瞬間、な
んと背後からお応えの声が聞こえた。

しかしそれはサンタの存在を真っ向から否定し、俺の夢も希望も見

事に打ち砕いてくれるダミた低音のハイテンションボイスだった。

「お待た〜！ 貴方のサンタガール登場よお〜！」

頼むよ〜待ってねえよ、そんなパツンパツンのサンタガールなんて見たくねえよ！ さっきの注文の品ってそれか！？

バッフィー、ある意味凶器だぞ、それ。

俺の気も知らない奴は、身体を左右にくねらせ上目遣いに瞬きして言った。

「貴方へのプレゼントはあ・た・しだぞっ！ 喜べこの野郎〜。ヒューヒュー熱いよ熱いよ！」

何っじゃ、そりゃ！？

正直俺は胸が悪くて言葉が出なかった。口を開いたら吐きそうだなのに…。

「も、茂吉いん…、ほっ放置プレイねっ！ ああ〜ん、ダメ！ 疼いちゃう！」

な、ナヌ！？

「やめろ、バッフィー…。やめろやめろやめてくれえっ！！」

バッフィーに勢いよく抱き着かれて倒れた俺は、床で頭を打ち脳震とうをおこした様だ。

意識がもつろつとし、されるがままに顔を舐め回される。

(く…臭い。バッフィー、お前…納豆食ったな…。サンタさん…、

いつそ俺を…殺してく…れ…ボタン)

俺は一体、何処へ向かっているんだろ…。

世の中余りに世知辛い、私を宇宙に連れてって!?

この家の主は俺だ…、俺の筈だ。その俺抜きで奴らはパーティーの計画を進めていた。

今の今まで、そう、パーティー当日の昼過ぎまで俺は何も知らされてなかったのだ。

何故気付いたか、それは…、予約してあるクリスマスケーキを取りに行けっよ!

「モキテイ、暇やる?」

と、きたもんだ。執事もメイドも居るのに、よりによって俺…? みたいな?

俺は渋々ながらも愛車の軽四に乗って出かけた。

クリスマスイブの夕方、商店街の駐車場はどこも満車。

ケーキを受け取るほんの数分だけ…、俺は路上駐車も仕方ないなど言う考えに至った。しかし皆考える事は同じらしく、ケーキ屋の付近にはズラッと車の列が…、結局俺が車を停めれたのは百メートル近くも離れた所だった。

車から降りると、冷たい北風に混じる雪がいきなり頬に張り付いてきた。

「さぶっ!」

俺はジャンパーのポケットに手を突っ込んで足早にアーケードの下を行った。すれ違うのは笑顔の親子連れやカップルばかり…、一人

なのは俺だけだ。

酷い…、酷すぎます、サンタさん！

確かに俺は孤独を望んだ…、しかしそれは、暖かい部屋の中で熱いコーヒーとテレビのある孤独なのです！ 欲を言えばクリスマスケーキも一人占めしたい。

なのにこんな…、身も心も寒過ぎる！

その時、電気屋さんのウィンドーの大画面薄型プラズマテレビに、記者に囲まれた行政のトップ・ユキヲ氏が映った。母親から常識はずれに多額の小遣いを貰っちゃった為、何だかんだ責められているみたいだ。

今に始まった事じゃないが、彼の大きな目はいつも虚ろだ。きつと肉体はそこに有っても心は愛妻と共に宇宙の彼方を旅しているのだらう。

そんな楽しい事を空想中の彼に、記者達は『金は贈与か貸付け、献金か』などと激しく詰め寄る。

言ってやれ！ いつもの小遣いだ、金が腐る程有んだから仕方ねえだらうと。どこかの誰かみたくキツパリ言い切ってやれ！ それを言っちゃあおしまいよ的な伝家の宝刀、『あなたとは違うんです』『』の一言をつ…！

そうやって俺がわざわざ足を止めて心のエールを送っている隙にも、笑顔の彼は専用機に乗り込み暖かい南の国へと飛び立って行った。

「あ、ケーキだ」

俺も自家用専用車を待たせている事を思い出しケーキ屋へ向かった。

さすがに混んでる。予約券を渡してケーキを受け取るだけの筈なの

に、前には八人程の人が並んでいた。
そしてようやく俺の前のおばさんの順番になった。

「三千円ちょうどになります」

若い女子店員が言つと、おばさんは財布をこそこそし始めた。

混んでるんだしさあ、値段わかつてるんだからお金用意しとこつよ
…、つて小銭チャラチャラ…？

お、おばさん？ 三千円ちょうどのどこを小銭で払おうつてんすか
っ！？

ふと目が合ったおばさんは、俺を睨み付けながら財布を抱えて身体
を背け、何故か苛立った口調で言つた。

「何！？ 何なの？」

それはこつちのセリフです。

「別に…」

「何考えてるの！？ 引つたくり？ 置き引き？ スリなの？ 駄
目よ、貴方まだ若いんだから働きなさい…」

「へ？」

痛いっ！ 周りの人の視線が痛いっす！！
おばさん何言つてくれてんすか！？ 俺はケーキさえゲット出来れ
ばいいんです！！

店内はシンと静まり返り、俺は一身に注目を浴びていた。理不尽な言い掛かりに屈する様で逃げ出す事も出来ない……。何なんだ！？ クリスマスイブなのに…。

サンタさんっ、我に救世主をーっ！ いでよ勇者、召喚っっ！！

ウィーン

店の自動ドアが開いた。

全ての視線がそちらに向く。

「年末の防犯警戒パトロール中です。変わった事無いっすかあ？」

それは見覚えのあるポリスメンコンビだった。

彼らは味方か！？ はたまた新手の敵キャラかあっ！？

頭も真っ白、ホワイトクリスマス!? ジンゲルベルは聞こえない…。

不自然に静まり返る店内の様子に何かを感じ取ったのか、中年と若手のポリスメンコンビはマジマシと一人一人の顔を見ている。

「あれっ!? あんた確か…」

若手の本官殿が俺に気付いた。

「こ、こんにちは…。先日は…」

まずい! この状況で警官に対し『お世話になった』などと言えば益々誤解を招くのでは…!?

俺は仕方なく会釈だけして口をつぐむ事にした。

しかしそんな俺を中年の警官は放っておいてはくれなかった。意味ありげにニヤついて目の前に来て言った。

「又君か! 何か問題でも?」

ほらな…、この人もSっ気たっぷりなんだよなあ。“又”なんて言い方して…、俺がしょっちゅう問題起こしてるみたいじゃねえか!? 見る! 他の客がヒソヒソ話して目を合わせてくれねえよ!

あんたらはやっぱり俺の味方じゃない様だな。

そつとわかれば用は無い…、さつさと出てけ!

意気消沈の俺は消え入りそつな声で答えた。

「いえ…、まだ…」

ハッ！！ バカバカバカバカ、俺のバカアー！！

『いえ…、まだ…』って、『まだ…』なんて言っちゃったよ〜！
やっぱり今から何かする気だったみたいじゃねえか！？

もしかしてさっきの“又”は、自白への誘導テク！？

ううむ、お主なかなかやるな…。亀の甲より年の功と見たっつ！！

そして案の定、おばさんは…。

「お巡りさん、お巡りさん！ このお兄さん、私の身体ずっと見てるんですう…、怖くて怖くて…」

バ、ババアア！！ 俺の方が怖いわ！ あんたの身体なんて見てねえつつうの！ 人をマニアックな痴漢みたいに言うなっ！！ 熟女も悪くはないと思うけど、熟すにも程があるっちゅうの！

しかし、ババアのこの言葉は意外にも俺にとって都合の良いものとなった。

他の客達が一瞬「ハア？」と言う顔をして、クスツと失笑してから散らばって行ったのだ。

『金を狙われた哀れな老婆』だった敵は、今や『人騒がせな勘違い騒音ババア』に変貌を遂げた。

「ほお…、で、何か被害は？」

オオオ！ 出たっ！ 必殺“何か被害は？”！！

説明しよう！ 彼ら国家権力の犬、いやもとい、彼ら警察は実際に“何か被害”がないと動けないらしいのだ。疑わしきは罰せずなのである。

「いえ…、別に…」

ババアは心なしかしょんぼりして言った。
ざまあカンカンカツパの屁〜！

「まあ、世の中何かと物騒ですからね…。それくらい警戒心を強く持たれてちようどいいかもしれません。お気を付けてお買い物を楽しんで下さい」

中年の警官は、緩くババアを諭して軽く敬礼した。

お巡りさん、やはり貴方は善良な庶民の味方だ！

わたくしを冤罪えんざいからお救い下さった。貴方はわたくしの勇者様だ！
しかし次の瞬間、その勇者様は信じられないお言葉をわたくしに耳打ちされた。

「君も守備範囲が広いねえ〜。威勢のいい彼女達とは上手くやってるの？」

ズコッ！！

あんた！ 俺を疑うにしても角度が違っぞ！

俺はババアの財布も熟れすぎた肉体も狙ってない！！

「しかし触っちゃいかんぞ、触っちゃ」

中年の警官は、一瞬不憫そうに俺を見て頷くと肩を叩いて去って行った。

当のババアはいつの間にか本官殿に擦り寄って行っている。

「貴方、演歌歌手のキヨシ君に似てるわねえ〜。今度差し入れして

あげるわ…、駅前派出所？」

俺の事などもうどうでもいい様だ。
俺はレジのお姉さんに予約券を渡した。

「五千円ちょうどになりまゝす」

「えっ？ お金…いるんですか？」

ニコやかなお姉さんの口元が微かに引きつった。

「はい、代金後払いでご予約頂いておりますので」

「すみません、出直して来ます」

俺は財布を持って来てなかった。予約時に金を払ってあるものだと
思い込んでいたのだ。財布は車の中だ。

五千円有ったかなあ…。この小一時間、俺は何をしてたんだろう…。
何か泣きそうな気分になってきた。それでも俺は頑張って自分に言
い聞かせる。

「右、左、右、左…、負けるな俺、一歩でも前へ！」

しかしそこには、今の俺には敵し過ぎる現実が待っていた…、って
言うか…。

「無い！？ 車が無い！？」

どうやらレッカー移動されてしまった様だ。財布ごと…、携帯も…。

俺を待っているものは何もなかった。

激しさを増す吹雪が、立ち尽くす俺を容赦なく叩く。視界は一面雪煙りに白く霞んで、今点いた外灯がぼんやり浮いて見えた。

そう、これは雪のせいだ…、涙なんかじゃないぞ！！　グスン。

嗚呼、サンタさんっ！

貴方は今頃の空を飛んでいらっしやるのでしょうか！？

俺はもう貴方を信じないっ！！

嗚呼、鐘と共に去りぬ！　そして今年も…。

『私達、結婚しまゝす！』

その書き置きだけを残し、美沙子と白執事が姿を消した。

大晦日、除夜の鐘が厳かに響き渡る頃、美沙子は俺の最悪の年と共に去っていったのだ。

そして、余り期待は出来ないものの、とりあえず新しい年が幕を上げた。

つけっぱなしのテレビからは、暢気な明るい声が『おめでと〜ございま〜す！』を連呼する。

俺の傷心も知らずに！！

何がめでたいものかつ！　美沙子がいないんだぞ！

めでたいのはその浮かれきったお前らの脳みそだっ！　現実を見てみる！　長引く不況、底無しのデフレスパイラル、政治家は皆同じ穴のムジナだし、地球は温暖化、経済は氷河期…、一年の計が元旦に有ろうが無かるうが、2012年に人類は滅亡するのだあーっ！　！　と、マヤの先人達は言ったとか言わないとか…。

前にも誰かがこんな事言った様な…。

そう！　忘れもしない、あれは1999年7の月、俺の親父はノストラダムスの予言を信じ、生きているうちに出来る限りの贅沢をしてやろうと考え、あちこちで制限棒一杯一杯の借金をしまくった。

彼が翌8の月を微妙〜な心境で迎えた事は言うまでもない。

ちなみに、その借金の返済は今もコツコツ続いている。

そんな親父を見て育った俺も実は今、すごい悩みを抱えている。

2011年7の月、テレビのアナログ放送が終了すると言う。

今も我が家のテレビ画面の右隅には嫌みったらしい『アナログ』の文字がうつすら刻み込まれ、『このままじゃ見れなくなるよ〜』み

たいな脅迫めいた文章が画面の下の方を流れていった。

しかあしつ！ 2012年に人類が滅亡するなら、その前年の完全地デジ化には何の意味が有るのか？ 地デジコールセンターは何も答えてはくれなかったが？

まあ、まだ若干時間の余裕は有る、“来年の事を言つと鬼が笑う”
とも言つし、再来年の事ともなれば爆笑の渦になるのは必至。

「超々ウケるんですけど」みたいな？

と、言う訳で…、何だったかな…??

オオツ！ そうだ美沙子だ！

去つて行く美沙子の姿が思い出した様に脳裏に浮かび、俺はその背
中に向けて叫んだ。

「美沙子お、カムバーツク！！ トウミー！」

「「うるっさいっちゅうの！！」」

双子のメイドにハモって怒鳴られた。既に本性丸出しの奴らは、す
っかりこたつが気に入った様で出ようとしない。

「チツ…。お前らのご主人様はどこ行つたんだ？」

「詣で」

見向きもせず、しかも初詣でを略しやがった。奴らの俺に対する態
度は、美沙子が去つてから豹変した。女を寝とられた駄目ダメ男だ
と小バカにしている様だ。

ム力つくし説教の一つもたれてやりたい、が俺は大人なのでここは
グツと堪えよう、最近の若いもんは…、と心でばやきながら。

『こちらの神社も初詣での人達で大変混雑しております』

ふとテレビ画面に目を向けると、いつの間にか漫才番組は終わり、どこかの神社の風景が映っていた。天気もいい様で、リポーターの後ろのガキ達が押し合いへし合い、携帯片手にピースしたり手を振ったりして俺を苛つかせる。

チャンネルをチェ〜ンジ！ と思った次の瞬間、俺は画面を二度見してしまった。

『こちらに外国からお越しの方達がいます。日本のお正月の印象を尋ねてみましょう』

マイクが外国の方達に向けられた。

『美沙ぢゃ〜ん！ 帰ってきてあげてえ〜！ 茂吉が可哀相よお〜！』

『ジョバンニ〜！ あたしが悪かったわあ〜！ 早く戻ってあたしを抱きなさい〜！』

そのバッフィーとバイエルンにくりそつな外国の方達は、正月とは無関係な事をダミ声で叫び、涙でズルズルの見苦しいオッサン顔でカメラに寄って来た。どアップすぎて鼻息が画面を白く曇らせる。その瞬間、映像はパツと花畑の静止画に変わった。BGMはビバルディの『四季』だ。

『そのまましばらくお待ち下さい』

生放送の恐怖！？ 今のは何だったのか…、あの外国の方達は正月の真昼間の全国放送で何をしでかしてくれたのか？

白執事はジヨバンニって名前だったのか…、そうか…、ジヨバンニ
ねえ…、ふうくん。

幸い双子のメイドはイビキをかいて眠ってしまっている。

俺は何も見なかった事にして、テレビを消しソファに寝転んで目を
閉じた。

知らない…、あんな恥ずかしい人達なんて知らないっ！！

きっとこれは悪い初夢だ…。早く覚めてくれえ！

味噌もクソも一緒にするな！ 類似品にご注意を！？

ぼんやりと心地良いまどろみの中、指先に温もりを感じた。

「美沙子…、おいで」

俺は目を閉じたまま、隣で眠る美沙子の肩を抱き寄せる。

「シャンプー変えた？ 毛がゴワついてるね」

美沙子は何も言わずに俺の頬を優しく舐めてきた。

「フフ、くすぐりたいよ美沙子。やめるよ、ハハハ…」

肩をすくめて顔を背けたが美沙子は尚も顔中を舐めくりまわす。
しつこい、そして……臭い。

「やめるよ、美沙子…。やめてくれ…。納豆食べたんだね…。少し臭うよ。やめるよ…。やめる…。やめろって言ってるのがよっ！」

俺は臭さに耐え切れず、美沙子を押しどけてしまった。

「あ〜〜れ〜〜！」

「バ、バッファイー！？」

俺の目はきつと瞳孔まで開いたに違いない。

「茂吉いん！ あたしよお〜！ 好きにしていいいのよ〜」

「バッフィー、やめろよ！ くっせえんだよ！」

俺は再びバッフィーに押さえ込まれ、糸をひく程顔を舐められた。どうやら俺は、バッフィーとバイエルンの醜態をテレビでみた後ソファで眠りほうけていたらしい。外はすっかり暗くなっていた。

「今夜は鍋よ〜！ おせちも飽きたでしょ〜？ パーツと飲みましようよ〜、嫌な事は忘れて。ねっ」

バッフィーが俺を気遣ってくれてるのが手に取る様にわかる。顔は恐いが根は優しい奴なのだ。

「あんたら、少し働きなさ〜い！ ほらほら、ぐうたらしないなや！ えらい太ったんやないか？ 出張手当て出さへんでえ！」

「「や〜だ〜」」

メイド達はバイエルンにケツを蹴られて渋々立ち上がった。

そしてその夜、俺は酔えない酒をしこたま飲んだ。

しかしバッフィーは早々に酔った様子で、俺の肩に頭をもたれ掛けて低く甘い声で囁く。

「あたし酔っちゃったみたい〜い、眠いの…」

「モキテイ、バッフィーもう寝かしたりいな。疲れたんやわ。あんなの為に神頼みしに行ったんやでえ」

バイエルンに促され、俺は一回り大柄で千鳥足のバッフィーをやっ

との思いで寝室まで運んだ。
ドサツと重なる様にベッドに倒れ込むと、バッフィーは少し苦しげに短く唸った後すぐに寝息をたて始めた。

幸せそうな顔しやがって…。

そうか俺の為にあんな事…。一途で健気だし、カワイイとこあんだけどなあ…。

「茂吉…、いるの？」

薄暗いテーブルランプの灯りの中、バッフィーがけだるそうに身体を起こし虚ろに揺れる瞳で俺を見つめる。

「バッフィー…」

何かが起こる…、そんな危険な匂いがした。
血迷った俺はバッフィーの肩を抱き、唇を…。と、その時バッフィーの表情が歪んだ。

「ごめん茂き…、ヴォエー！」

キヤインキヤインキヤイン！！

バッフィーは俺の顔めがけて思いきり吐き散らし、スッキリ満足げに再びの眠りに落ちていった。

その頃、俺がトイレで便器を抱えて貰いゲロに涙していた事は誰も知らない…。そして勿論、誰にも言えない…。

お食事の方、ごめんなさい。

怒りの鉄拳と愛のムチは紙一重！？ 遅し過ぎる想像力は勘違いの素！

俺は今、都内某所のホテルの一室に居る。

何と今からテレビの取材を受けるのだ。顔は映さず、音声も変えて貰う事になっている。

スタッフさん達が打ち合わせしているのを物珍しげに見ながらも、俺は若干の緊張と肉球が汗ばむのを感じていた。

それは一週間前の事だった。

『毎朝テレビの者』と名乗る男から電話があった。毎朝テレビと言えば、正月の神社でバッフィーとバイエルンがご迷惑をおかけしたテレビ局だ。

(まさか損害賠償の請求！？ それにしても、何故この電話番号が…、恐るべしTVのチカラ！？)

取りあえず下手に徹すれば少しはまけてくれるかも、と俺は考えた。

「その節は、うちの者達が…」

「その事で折り入ってご相談が…」

俺の言葉をさえぎり、男がその後語り始めた内容は、到底俺には理解し難いものだった。

正月のテレビで、バッフィーとバイエルンが世にもおぞましく涙ながらに訴えた後、局の電話が暫く鳴り止まなかったそうだ。苦情の電話かと思いきや、そうではなかったらしい。

『美沙子とジヨバンニは戻ったのか？ いきさつの再現ドラマはなののか？』と言う問い合わせや、『茂吉に元気を出してと伝えて』、『勇気と感動を貰いました』と言った励ましの電話がほとんどだったと言うのだ。

更には、美沙子の搜索費用の足しにとカンパまで届けられているらしい。それらは匿名が多く、送り返す事も出来ずに困っていると言う事だった。

「そんな事、俺に言われても…。頂く訳にはいけないので、どちらかに寄附されたらどうですか？」

俺は美沙子を捜してまで無理矢理連れ戻すつもりはなかった。惚れた女が選んだ道なのだ…。幸運を祈り黙って見送ってやるのが男の美学と言うものだっ！ アバヨ、美沙子！ いい夢見せて貰ったぜ！ いやいや、みなまでは語るまい…。男は無言の背中で語るべし！！

「もしもし？ どうしました？ もしもし」

おおっと、俺としたことが…。背中であくく語っても電話じゃ伝わらない様だ。

その後『毎朝テレビの者』は、是非カメラの前で俺の口から事情説明して貰えないかと出演交渉してきた。お昼のワイドショーの中のコーナーで、スタジオと中継車を繋いでの生放送だと言う。

「そんな、無理ですよ」

「だ〜い丈夫ですって！ 司会のノミさんはベテランですから。茂吉さんは皆さんの善意に一言感謝を述べて、後はお返事だけして下さい。下されば結構ですよ」

「そうなんですか？」

「そうなんです！」

俺は渋々出演を承諾し、現在に至る訳だ。

後で聞いた話だと、あの日バツフィーとバイエルンは『ギャラを振り込んで！』と、俺の名前と電話番号、そして銀行の口座番号までを書き残していったらしい。何故奴らが口座番号を知っていたのかは謎だ。

今日の事も奴らには内緒にして来た。何をしでかされるか分からないから。

やがて本番が始まりオープニングがモニターに映る。ノミさんはジュークでスタジオの客を笑わせた後俺に語り掛けてきた。

「えー、都内某所の茂吉君」

スタッフに合図され俺の緊張はピークに達した。

「ハ、ハイ！ こちら都内某所の茂吉んであります！」

まずい！ テンパって声が裏返った。茂吉んとか言ってるし…と、次の瞬間。

バーン！！

大きな音と共に部屋のドアが勢いよく開いた。

「やいやいやいやい！ てめえら、あたしの茂吉んをこんなところに連れ込んで何しようってんだあ！？」

「あんたらの悪事はお天道様が許しても、うちらが許さへんでえ！」

「バッフィー！？ バイエルン！？」

二人は遠山の金さん張りに腕まくりをして乗り込んできた。

「茂吉いん！ 大丈夫？ 悪戯されてない？」

バッフィーは俺に駆け寄り、アイラインで黒くなった涙をぽろぽろ流す。

「は？ 悪戯？」

「そつよ、xxx(ピー)なことやxxx(ピー)なこと！

こそこそしたつて駄目！ 銀行にもお金が無いし、美沙ちゃんにも捨てられて、ヤケを起こしていかかわしいビデオに出るつもりだったのね！？ バカアツ！！」

バチン！ ボコツ！ あべし！！

勘違いの怒りに駆られたバッフィーの拳は手加減と言うものを失っており、俺は全治3週間の傷を負わされ入院した。

さすがのノミさんも為すすべがなかっただろつ。

生放送中の流血沙汰に不適切な発言、毎朝テレビは社長を更迭し、状況説明と今後の対策・陳謝の特番を制作し放送した。

俺はそれを病室のテレビで点滴を打たれながら見ていた。ギプスの中の足の痒みに悶えつつ。

自分の命が既にカウントダウンを始めているとも知らずに…。

怪我の功名！？ 白衣の天使が舞い降りた！ 惚れてまうやろ！

俺の入院生活はバラ色だ。右足と肋骨ろっこつを骨折しているが担当ナース・オコジヨの瞳ちゃんがいるから！

彼女は白衣の上からもそのナイスなボディがうかがえる、ダイナマイツなハニー！ なのだ。

「午後のおねちゅ測りましゅねえ」

瞳ちゃんが長いまつげをパチパチしながら、少し舌足らずで言った。じゅうにぶんぶんに大人な体つきと少女のままの表情と声が、何ともアンバランスで俺を萌えさせる。

「ハ〜イ、喜んでえ〜」

俺は服従のポーズで彼女の差し出す体温計を受け入れた。

「脈とりましゅねえ〜」

瞳ちゃんのしなやかな手が俺の手首に触れる。

駄目だよ〜、瞳ちゃん〜ん。ドキドキしちゃって脈が早くなっちゃうかもよ〜？ 胸がときめいて、く……苦しい〜！ なんちゃってえ。

その時、カルテをパラツとめくった瞳ちゃんが、俺の顔を見つめて信じられない言葉を口にした。

「茂吉しゃん、入院してから一度もウンチ出てましえんねえ…、お

腹苦しくないでしゅかあ？」

「ウ…。いつもの事だから、大丈夫です」

俺は打ちのめされた様に茫然自失で嘘を答えた。

俺はガキの頃から毎朝快便だけが自慢の男だ。そんな俺の腹は入院してから丸一週間分のブツでパンパンだった。おそらく環境なんかが変わったせいだろう。

俺はデリケートに出来ているからな…。

いいや！ そんな事はどうでもいい！

ナースと患者と言う関係上、しびんでオシッコを取って貰うのは我慢してきた。でも俺は…、俺は瞳ちゃんの口から“ウンチ”なんて単語を聞きたくなかった！ 俺の白衣の天使が…、ウンチと…。

しかし次の瞬間、白衣の天使は更なる試練をサラッと俺に与えた。

「浣腸してみましゅかあ？」

「か、浣腸…」

バツフィーがいたら『あたしにやらせてえ〜！』と喜んで食いつきそうだ。そう、やるなら奴にやらせた方がまだマシだ。

瞳ちゃんにケツの穴を見られるのだけは何としても阻止せねばっ！

「もう少ししたら出ると思うんで…」

「そつでしゅかあ？ 苦しくなったらいちゅでも言っ下しやいねえ」

瞳ちゃんは笑顔でそう言い残して出ていった。

やっぱりカワイイ！

俺はとろけそうな気持ちになって思わずニヤけた。

“ウンチ”だって“浣腸”だって、何だか愛おしく思えてきたぞ。

君とならどんな汚物も乗り越えられる！ 乗り越えてみせるぜ、瞳ちゃん！

俺はその瞬間を妄想せずにはいらなかった。

『フフ。茂吉しゃん…、もっと力を抜いてくれないと入らな〜い』

『瞳ちゃん、君って意外と大胆なんだね。嫌いじゃないよ、そう言うの…フフフ』

フフフフフ、ククククク、ブアーハツハツ…痛っっ！！ 痛いっ！

肋骨があっ！！ 又折れた！ 又折れたよお！ 何かポキッって

言った！！ あううっ！！

痛みに体がよじれるが動けばもっと痛い。俺がそのジレンマとの孤独な闘いを繰り広げていると、ふと懐かしささえ覚える二人の顔が目に入った。

「ケンタ、涼二。来てくれたのか」

俺は旧い友人達の笑顔を見て、不覚にも涙ぐんでしまった。

涼二は何故かバツフィーと反りが合わない。犬と猫なのに“犬猿の仲”と言うやつだ。だからバツフィーが来てからは疎遠になっていた。

ケンタは草食動物とのコンパをセッティングして、美沙子の逆鱗に触れて以来ご無沙汰だった。

今にして思えば、彼らとの日常は不愉快ながらも何と穏やかで平和だった事か。

「テレビ見たニヤ。俺にニヤニか出来る事ニヤイ？」

りよ、涼二い！ その言葉だけで十分だ。俺、頑張るよ！！ って
…、ケンタ？

「コッ、コッ、コッ…」

「痛、痛、痛あい！」

ケンタ！ ギブスをついばむなっ！ 脳天に響くっ…！？ キヤ
イキヤーン！！」

この野郎！ ギブスに穴開けて中身をつつきやがった！

あまりの痛みに涙がちよちよぎれる。と、次の瞬間、まばゆいばかりの白い閃光が俺の目を射った。

「ぐっ！ 何なんだ！？」

思わず目を閉じた俺の耳に涼二の笑い声が聞こえる。

「ニヤハハハハ、悪い悪い、今の表情最高！ 写真、ブログにアッ
プしとくニヤ」

「ブログ…グ？」

涼二が誇らしげにデジカメを見せる。

「お前の事書いた途端にアクセス数急上昇でニヤ。えっ、知らニヤ
いの？ 今、巷^{ちまた}じゃ、お前の写真を携帯の待ち受けにすると災難を
全部持つてってくれるって噂ニヤ…。俺のブログにもレアな写真の

一枚もあつた方がいいかニヤと……」

「帰れえーっ！！ 二度とその面見^{つづ}せんなあ！ 痛たたた……」

思い出したぞ……、奴らの何が俺を不愉快にさせるのかを。あの果てしないマイペースさだ。しかも手ぶらかよ！？

いや……、まてまてまて。いつの間にこんな所に……、俺の股間に湯気の上がる卵がっ！？ ケ、ケンタの置き土産……。
許せケンタ、今の俺は父親になる自信が無い！！

そうして俺が卵の扱いを思案している頃、病院の受付には一人の女が立っていた。

「あの……、茂吉さんの病室は？ 私ですか？ 私は……彼の恋人です」

風邪はひき始めが肝心！ 骨折は治りかけが肝心！？ くれぐれもお大事に…。

さつきまで見えていた青空は、いつの間にか暗い雨雲に覆われ消えていた。

この窓から他に見える物と例えば、コンクリートの壁とエアコンの室外機や屋上の貯水タンク。何だか殺伐としていて気が滅入る。

ここは二人部屋だが、隣のベッドはずっと空いたまま。始めのうちは個室みたいで得した気分だったが、こんな天気の日には話し相手が欲しい気もする。

バツフィーは一度も顔を見せない。そうちようど今頃、毎日午後3時にナースステーションに洗濯した着替えや雑誌なんかを預けに来ているくせに…。バイエルンの話しでは、俺に怪我をさせた責任を感じ、かなり落ち込んでいるらしい。合わせる顔がないと思っっているのか？

もう少し動ける様になったら、ナースステーションで待ち伏せしてやろうと俺はひそかに企んでいる。

奴に悪気がなかった事は分かっている。俺を思う余り、我を忘れたつてとこだらう。いかんせん、腕力は男だからこの外ダメージは大きかったが…。

益々暗くなる空模様と、低く微かに唸るエアコンの運転音が俺を眠りに誘う。

肋骨を氣遣いながら欠伸を一つした、その時だった。

ドアがスーッと静かに開けられ、俺は一瞬で目が覚めた。そこに彼女が立っていたからだ。

「み…美沙子…？」

しかし次の瞬間、

「アチョー！！！」

どこからともなく聞こえた甲高い雄叫びと共に美沙子の姿が消えた。つて言うか吹っ飛んだ。

そして廊下に響き渡る怒号。

「いきなり何すんのよ！？ このカマ野郎！」

「あんたこそどの面^{めん}さげて戻れたのよ！？ 尻軽淫乱女！！」

「キーーーー！！！」

「ウキキィー！」

開いたままのドアの向こう側をがっぷり四つに組んだ美沙子とバツフィーが蟹の様に横走りしていった。

「キヤ〜！ 喧嘩よ〜！！！」

「君達！ やめなさ…ギヤツ！」

何？ 壁の向こうで何が起こってるんだあ！？

動けない俺は耳をそばだて聞こえてくる音や声に神経を集中した。

ガラガラ！ ドシャーン！ ガシャン！

「ああ！ 心電図があっ！！ 酸素マスクも！？」

心電図！？ 酸素マスク！？

やばい！ 早く止めなければ死人が出るぞっ！
今、奴らを止められるのは俺だけだあっ！！

「待つてる美沙子！ バッファイー！！ 喧嘩をやめて、俺の為に
争わないでえ〜！！」

俺は痛む体で起き上がろうと必死にもがいた。額にはうっすら汗さ
え滲むのに、体は微動だにしない。
己のふがいなさに涙で視界がぼやけた。

「美沙子…、バッファイー…」

「…キー、モツキー？ 大丈夫？」

「美沙子…」

静かな病室の入り口に微笑む美沙子がいた。
どうやら俺は酷い夢を見ていた様だ。額と肉球に汗をかき、頬には
涙が一筋零れていた。

「ああ…、夢でよかった」

俺はホッと胸を撫で下ろし、美沙子に目を向けた。と、その時どこ
からともなく…。

「アチヨー！！」

やめろー！！

思わず動いた瞬間、俺の肋骨はポキッと小さな悲鳴をあげた。

もう、やだっ！！ ホントに…。

知らぬが仏！？ 嗚呼、徒花（あだばな）に終わった恋。

俺は担当医に叱られ、絶対安静をきつく言い渡された。

前回『アチヨー！』と叫んでいたのはどこかよそのガキで、俺はまさに“骨折り損のくたびれ儲け”。我ながらウマいっ！

どうやら美沙子は、ただ単に見舞いに来てくれただけの様だ。

「今、幸せなのかい？」

美沙子はため息をついて首を横に振った。

「別れたのよ。彼…、ギャンブル狂でアル中で借金まみれだった…。あたしって男を見る目が無いのよね、昔から」

うお～い！ 今、何気に俺まで否定したな！？

まあ確かに俺はいい彼氏だったとは言えないかも知れない。

しかし、この頃になってようやく美沙子の幸せを心から願える様になったと言うのに…、この展開は俺にとっても複雑な心境だ。

少し痩せた様にも見えるし、笑顔にも覇気が無い様な…。実は俺とよりを戻したいとか！？

いやいや、それは困る！ 今の俺は瞳ちゃんとの新しい愛に向かつて既に走り出してしまっている！ 俺は過去を振り返らない男なのだよ！！

と、その時ドアがノックされ、瞳ちゃんが顔を覗かせた。

「茂吉しゃ～ん、点滴のお時間で～しゆ」

「それじゃあ、私これで…」

気を遣って立ち上がるうとする美沙子に、瞳ちゃんが笑顔で言った。

「大丈夫でしゅよ。しゅぐしゅみましゅからお話ししてて下しゅい」

そして手際良く点滴の針を刺しながら、今度は俺に天使の微笑みを向ける。

「茂吉しゃんの彼女しゃんでしゅかあ？ 綺麗な方でしゅねえ」

「違っよ、ただの友達さ…」

美沙子は俺の様子から何かを察したのか、ニヤリと不気味に笑った。

「そうよ、看護婦さんこそ可愛くてモツキーのタイプよねえ…。看護婦さん、フリーだったらお付き合いしてあげてよ」

オオ！ 美沙子、ナイスセンタリング！

とは言っても、一度はスルーしとくかな。

「おいおい…」

俺と瞳ちゃんが口を開いたのは、ほぼ同時だった。

「残念でしゅう…。私、春に結婚しゅるんでしゅよお」

えっ！？ えええっ！？

聞いてないよー！！

俺は言葉を失った。しかし美沙子は尚もニヤついて俺をチラ見しつつのたまう。

「へえ、そうなんですかあ？ おめでと〜ございますう…、お相手は？ ひよつとしてドクターとか!？」

瞳ちゃんは頬を染めて頷いた。

「高橋しえんしえいでしゅ」

ガビーン！ 俺の担当医じゃねえか!? あのヤブ、職場を何だと思っただ!? ちょっとイケメンだと思いやがって、ムカつく!!!

お前の下半身の暴れん坊將軍を絶対安静にしろっ!! 麻醉で眠らせとけ!!! 隔離だ隔離しろ!

俺はやけくそついでに言っただ。

「看護婦さん！ 浣腸して下さい!!!」

「ブツ！」

美沙子が吹き出した。

かくして薄氷の様な俺の恋は、春を待たずして儚くも消え去ったのであった。

…ウマいっ!

策士、策に溺れる！？ 掘った墓穴は深すぎた！？

瞳ちゃんの結婚。

その告知は、まるで余命宣告の様に俺から全ての気力を奪い去った。もはやここに居る意味すら感じられない。

『まあ、元気出しなさいよ。又来てあげるから』

美沙子はそう言った。

これからは美沙子とは友人として付き合っていくのだろう。

男女間の友情…、それは一通りの関係を経た男女間のみが存在するのだと俺は思う。ドロドロの愛の燃えカスこそが男女間の友情たり得ると。

そう言う意味で、美沙子と俺の間には確固たるドロドロがある。

ドキドキもワクワクも胸キュンも新鮮味のカケラも無く、あるのは使い古した感と今更感…。

何だかぼろくそに言ってる様だが、裏を反せば気取らず有りのままを受け入れ合える、楽で心地よい緩い関係なのだ。

その美沙子が帰り際に言った。

『あたし…、バウちゃんから電話貰って来たのよ。モッキーに会ってあげて…。そうでなきゃあたし、合わせる顔がなくて来れなかった』

俺はバッフィーの気持ちを素直に嬉しく思った。しかし、それと同時に未だ顔を見せないバッフィーが腹立たしくもあった。

『気にするな、お前はいい奴だ』

その一言を早く言つてやりたいのに…。

そこで俺は、事情知つたる美沙子の協力を得て強行手段に出る決意をした。

美沙子がバツフィーを訪ね、俺の容態が急変しうわごとでバツフィーを呼んでいると告げるのだ。奴は血相変えてと飛んで来るに違いない。そして元気な俺を見て、『本気で心配したじゃない！ バカア！』と…、胸に飛び込まれても困るので握手にしよう。そして取つて置きあの言葉を言つてやるのだ。

名付けて…“バツフィー、おびき出し大作戦！！” ヒューヒュードンドンパフパフ…！

何を隠そう、この作戦は至つてシンプルかつ古い！ しかし、テレビドラマや映画でも散々使われた、そんなバカげた手法…、と誰もが思う、その盲点こそを突いた画期的な作戦と言えるのだ！！

決行は明日、ひとよんまるまるじ、つまり午後2時かつきりに遂行される。

俺はその夜夢を見た。

作戦は大成功、バツフィーは涙ながらに俺の寛大さに感謝していた。美沙子も俺とよりを戻したいと必死に訴える。たまたま見ていた瞳ちゃんも感激のあまり、

『高橋しえんしえいとは別れましゅ！ 茂吉しゃん、私とお付き合
いして下しやい！』

と右手を差し出す。

俺は窓の外に目を遣り唇を噛み締めてから、こう言うのだ。

『いけねえよ、瞳ちゃん。俺みてえなアウトローに女は必要ねえの
さ…。美沙子も、俺の事は忘れてくれ…』

とは言っても、結局美沙子と瞳ちゃんに押し切られ、

『しょうがない困ったお嬢さん方だ…、俺も初めてだが3人で仲良くしちゃう？ ん？ ん？ よいではないか、よいではないかあゝ！』

『あゝれゝゝ！』

と渋々二人ともに付き合わされちゃう…、そんな夢だ。

翌朝、よだれを垂らして目覚めた俺は、何だ夢か…と気落ちしつつも、心穏やかにして決行の時を待った。

そして、午後2時を15分程過ぎた頃、いよいよ奴がやって来た。ドタバタと大袈裟なスリッパの足音を廊下に響かせ、久しぶりに聞くダミた低音のお姉言葉で叫びながら。

「茂吉いゝん！ 今行くわゝ！ 死んじやだあゝ！」

そして足音が止まった次の瞬間、病室のドアがやや乱暴に開けられた。

バッフィーの気配が眠った振りをする俺に近付く。

今だ！ 目を開けたらきつと驚くぞ…と思っただ、その時だった。

「ひどい…、末期って言ったって、こんなの急過ぎるわ…。お別れも言えなかった…ワオ〜ン！」

バッフィーはへなへなと座り込み、遠吠え混じりに泣き叫んだ。

ぱっちり目を開けても気付いて貰えない俺は、真っ白な天井を見つめて何度も瞬きしている。

確か俺って骨折で入院したんだよね？

“末期”って…、“末期”って何のおお！？

絶体絶命？ 絶対安静！ 病院内ではお静かに！！

始めは、やはり後ろめたさだったらしい。バツフィーが俺に顔を見せなかった理由。

しかし、俺が入院して三日目にバツフィーは偶然ナース達の話しを聞いてしまったと言う。

『茂吉さん、もういつどうなってもおかしくない状態ですって』

『そんな末期になるまで気付かなかったのかしら、お気の毒に…』

バツフィーはそれを自分の胸だけにしまい込んだものの、俺の前で平静を装う自信が無くて顔を出せなかったらしい。

泣き腫らして真っ赤になった目…、それを俺に見せたくなかったのだ。

バツフィーはさっきから俺の右手を両手で握りしめて離さない。ポトポト落ちる涙を拭おうともしない。

それが余りに悲しげで、俺は泣く事が出来なかった。俺が泣いたらバツフィーはもっと悲しむだろうから。

俺は込み上げる涙をごまかす様にふざけた調子で言った。

「思い残しの無い様にしないと…。わがまま言うけど大目に見てくれよな…」

「茂吉ん、何でも言って！ あたし、ずっと側に居るわ！」

以前なら鳥肌ものだったバツフィーのこんな言葉も今は心強い。

「あたしも居るわ…」

いつの間にか美沙子が立っていた。悲痛な表情ながらも涙は見せない、その気丈さが彼女らしい。きつと、夜一人になった布団の中で、そつと枕を濡らすのだろう。そんな女なのだ、美沙子と言う女は…。

俺は彼女との楽しかった日々をふと思い出した。

俺は再び外へ出て行く事が出来るのだろうか…、自分の足で歩く事が出来るだろうか？ 健康って素晴らしい！ 失くして気付く大切なもの！！

と、その時、ドアがノックされバイエルンが入って来た。

「おひさ〜！ って言うか、重っ！ この部屋の空気重たない？」

突然のハイテンションには誰もついていけない。バイエルンは無言の俺達を尻目に喋り続けた。

「うちらなあ、そろそろ故郷くにに帰ろう思てんねん。バッフィーはどつするん？」

「う〜ん。あたしは、茂吉の最期を見取ってからにするわ」

さ、最期を…見取…って？

俺は我が耳を疑い、思わずバッフィーを凝視した。

バ、バッフィーお前…、何かサラッと酷い事言っでんぞ！ 本人目の前にして言う事かっ！？

デリカシーってもんが無いのか、お前には！？

そしてバイエルンと美沙子と言えば…、やっぱりガンつけ合ってるしい。

「ほんならうちら先帰るでえ。ジヨバンニも戻って来たし。又、どつかの泥棒猫に狙われんうちに連れてかえりたいねん」

バイエルン…、それは挑発と言つものだ…。

「ちよつと待ちや〜」

ほらあ、美沙子が“極妻”見た後みたいに肩いからせてるよ…。

「あんたあ、泥棒猫てわての事言つてまんのかあ？ わては猫ちゃいまっせ〜、犬でんねん」

皆知つてるし…、そう言う意味でもないし…。

「ハハハ〜美沙子はん、ジヨバンニが言つてたでえ…。あの女は強情でいけずな可愛いげの無い雌ブタやつてなあ〜！」

「あのイ○ポ野郎！ 何言つてくれてんねん！？」

「ちよつと！ ジヨバンニはイ○ポやあらへんっ！ 早いだけや…」

嫌だよ〜、何の話しだよ〜。暴露大会になつてんじゃんかよ！ どつちだつていいよ、そんなの！

ここは末期患者の病室だぞ…。
しかし男を巡つて敵対する二人は、そんな俺の気持ちなど知つたこつちやない様だ。

「カマ野郎のあんたにはお似合いよ！ 知らないでしようけどね、あいつ、あんたの城の権利書売りさばいて、その金全部パチンコで

すってたわよ！ 一文無しになって戻って来たんじゃないの〜？」

「嘘っ！？ 又！？ 帰るとこのおなつたやん！」

バイエルンはガツクリ肩を落とし、不毛な罵り合のしいは美沙子の勝利に終わった。

その夜、ドツと疲れて何も考えられなくなった俺は、消灯を待たずして深い眠りに引き込まれた。

しかしそれは束の間の安らぎに過ぎず、間もなくやって来る深夜の訪問者達によって、俺の穏やかな眠りは無惨にも打ち砕かれる事となるのだった。

ちなみに俺は絶対安静です…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7239i/>

茂吉と愉快なつわもの達

2010年10月28日08時00分発行